

30 岡崎国第2-3号
平成30年12月1日

関係大学大学院研究科長 殿

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長
山本 正 幸
(公印省略)

2019年度自然科学研究機構基礎生物学研究所
特別共同利用研究員の受入れについて(通知)

基礎生物学研究所は、大学共同利用機関として、広く基礎生物学及びこれらに関連する分野における研究者との共同利用に供されるとともに、研究者の養成に関しては、国、公、私立大学の要請に応じて、大学院の学生を「特別共同利用研究員」として受け入れ、併せて研究指導を行い大学院教育の協力を行っています。

ついては、別紙受入要項のとおり2019年度の特別共同利用研究員を募集しますので、貴研究科の関係者に周知くださるようお願いいたします。

なお、基礎生物学研究所ホームページ(<http://www.nibb.ac.jp/collabo/education.html>)でも特別共同利用研究員の募集についてのご案内をしていますのでご覧ください。応募書類の様式1、様式2、様式3をダウンロードしてご利用いただけます。

2019年度

基礎生物学研究所特別共同利用研究員受入要項

1. 受入人員

細胞生物学	若干名
発生生物学	若干名
環境生物学	若干名
神経生物学	若干名
進化多様性ゲノム生物学	若干名
生殖発生学	若干名

2. 受入対象

大学院に在学中の者(基礎生物学及び関連分野の専攻者)とします。
ただし、修士課程(博士課程(前期))の学生については、当該大学院における授業・単位取得等に支障のない者に限ります。

3. 提出書類

- (1) 所属する大学院の研究科長の受入申請書(様式1)
- (2) 指導教員の推薦書(様式2)
- (3) 推薦書(受入承諾書)(様式3)※
- (4) 当該学生の略歴、研究歴(A4判用紙を用い横書とする。)

なお、日本国外からの申請にあつては、上記提出書類に加え、当該学生の在学証明書を提出してください。

※ 様式3については、受入れの指導担当研究教育職員から直接「11. 書類提出先」に提出してください。

4. 受入期間

原則として2019年4月から1年間とします。ただし、特に必要と認められる場合は、年度中途において受入れを許可することがあり、この場合の受入期間は、6ヶ月以上を原則として、受入れを許可した年度の末日までとします。

なお、場合により延長(修士課程(博士課程(前期))の学生は、1年を超えないものとします。)又は短縮を認めることがあります。

5. 研究場所

基礎生物学研究所(岡崎市明大寺町字西郷中 38 又は岡崎市明大寺町字東山 5-1)

6. 提出書類の締切

2019年2月13日(水)

なお、前記4のただし書の場合にあつては、受入れを希望する1か月前とします。

(注) 書類提出前に、あらかじめ所内の受入れの指導担当研究教育職員と受入について、十分打ち合わせてください。

7. 授業料

無料

8. 審査

提出された書類に基づき所内の委員会において審査し、その結果を研究科長に通知します。

9. 研究指導項目及び指導担当研究教育職員

研究指導項目	研究部門等名	教授	電話番号	准教授	電話番号
細胞生物学	細胞動態	上田貴志	55-7530		
	定量生物学	青木一洋	59-5235		
	クロマチン制御	中山潤一	55-7680		
	神経細胞生物学			椎名伸之	55-7620
	幹細胞生物学			坪内知美	55-7693
	時空間制御			野中茂紀	55-7590
	オルガネラ制御			真野昌二	55-7500
	核内ゲノム動態			宮成悠介(*)	59-5850
発生生物学	形態形成	上野直人	55-7570	木下典行	55-7573
	分子発生学	高田慎治	59-5241		
	初期発生	藤森俊彦	59-5860		
	構造多様性			児玉隆治	55-7578
	植物発生生理			川出健介(*)	59-5883
環境生物学	環境光生物学	皆川 純	55-7515	高橋俊一	55-7517
	植物環境応答	森田美代	55-7556		
	光学解析室			亀井保博(*)	55-7535
神経生物学	神経行動学	東島眞一	59-5875		
	神経生理学			渡辺英治	59-5595
進化多様性ゲノム生物学	生物進化	長谷部光泰	55-7546	村田 隆	55-7549
	共生システム	川口正代司	55-7564	征矢野敬	55-7563
	進化発生	新美輝幸	55-7606		
	バイオリソース	成瀬 清(*)	55-7580		
	生物機能情報分析室			重信秀治(*)	55-7670
生殖発生学	生殖細胞	吉田松生	59-5865		

*は特任教員

電話はダイヤルイン方式になっておりますので、市外局番 0564-部門電話番号をダイヤルしてください。

所内対応指導担当研究教育職員の最新情報は、基生研ホームページ (<http://www.nibb.ac.jp/>) をご覧ください。

なお、詳細については、各指導担当研究教育職員に問い合わせてください。

10. その他

万一の災害等について、公益財団法人日本国際教育支援協会の行っている学生教育研究災害傷害保険（付帯賠償責任保険を含む。）は、本研究所において発生した災害等の場合も適用されますので、あらかじめ所属大学で加入の上申請してください（本研究所では、特に災害補償制度は準備しておりません。）。

11. 書類提出先

〒444-8585 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38
自然科学研究機構 岡崎統合事務センター
総務部 国際研究協力課 大学院係
TEL(0564)55-7139(ダイヤルイン)

（封筒の表に「特別共同利用研究員書類在中」と朱書のこと）

基礎生物学研究所の研究部門・研究室の研究の現状

○ 細胞動態研究部門

ゴルジ体や液胞などの単膜系オルガネラ間を結ぶ物質輸送機構、“膜交通”は、原始真核生物からヒトや植物を含む現存の生物に至るまで保存された普遍的な細胞機能である。一方で、真核生物の各系統は多様性に満ちた体制や生命現象を獲得しており、その発現においても、各オルガネラの機能や膜交通が重要な役割を担っている。我々が研究対象とする植物においても、形態形成や自然免疫、環境応答などの植物独自の現象に膜交通が深く関与することが、我々をはじめとする各国の研究グループにより明らかにされている。我々の研究室では、シロイヌナズナとゼニゴケのオルガネラ機能や膜交通の分子機構を比較解析することにより、陸上植物において膜交通経路やオルガネラ機能の新生や多様化がいかんして起こってきたのかを明らかにするとともに、それがどのような形質の進化と関わっているのかを明らかにするべく研究を行っている。

○ 定量生物学研究部門

細胞とは、外界からの入力情報を処理し、表現型を出力するシステムと捉えることができる。そのシステムの実態は細胞内のシグナル伝達系であり、極論すると物理化学的な反応の連鎖である。従って、理論的には全て微分方程式で記述し、コンピューターで数値計算することで全ての要素の振る舞いとその結果としての表現型を予測することが可能である。しかし、反応を計算するための定量的な情報が現状では圧倒的に不足している。本研究部門では、細胞がもつ特徴的な表現型である「増殖」、「分化」、「細胞死」に関わるシグナル伝達系を定量的に理解することを目指している。生化学、分子生物学、細胞生物学、イメージングなどの手法を用いた反応パラメーターの測定、コンピューターを用いた数値計算、さらに光や化学物質によるシグナル伝達系の摂動などを組み合わせて研究を進める。

○ クロマチン制御研究部門

真核細胞のゲノムには、高度に凝縮したヘテロクロマチンと呼ばれる構造が存在している。このヘテロクロマチンは、転位因子（トランスポゾン）や反復配列など、本来ホストのゲノムにとって不必要な配列の増幅を抑制するために重要な構造であるばかりでなく、セントロメアやテロメアなど、染色体の正確な分配や構造の維持に必要な機能ドメインの形成に寄与するとともに、エピジェネティックな遺伝子発現の制御にも重要な役割を果たしている。したがって、このヘテロクロマチンを形成する分子メカニズムが明らかになれば、複雑なエピジェネティック現象の理解につながると考えられる。様々なモデル生物による研究から、このヘテロクロマチンの形成過程に、二本鎖のRNAによって引き起こされるRNAサイレンシングと呼ばれる現象の関与が明らかにされているが、その分子機構の詳細

細には依然数多くの謎が残されている。本研究部門では、分裂酵母、哺乳類動物細胞、繊毛虫類テトラヒメナを用いて、生化学的、遺伝学的、分子生物学的手法を統合して、高次クロマチン構造の形成メカニズムの解明に取り組んでいる。

○ 神経細胞生物学研究室

DNA→mRNA→タンパク質という遺伝子発現は生命活動の根幹であるが、神経細胞ではこの遺伝子発現のうち、タンパク質への翻訳が局所的に制御されている。すなわち、一部の重要なmRNAが神経樹状突起へ輸送され、入力があったシナプス近傍で局所的にタンパク質へ翻訳される。このmRNA輸送・局所的翻訳制御によって、入力強度・頻度の高いシナプスが選択的に強化され、それが記憶や学習に重要であることが明らかにされてきている。樹状突起へのmRNA輸送と局所的翻訳制御に中心的な役割を果たしているのがRNA granuleと呼ばれる巨大複合体である。本研究室ではRNA granuleに局在するRNA結合タンパク質およびmRNAを同定、解析するとともに、それらがシナプス機能、神経ネットワーク形成、さらには記憶や学習などにどのような役割を果たすかについて、マウスを用いて分子レベルから個体レベルまで研究をおこなっている。

○ 幹細胞生物学研究室

胚性幹細胞は個体内の全ての細胞種を生み出す能力（多能性）を持つ特殊な細胞集団である。不思議なことに、動物の多能性幹細胞の多くは、発生初期に一過的にのみ出現し、その後消失する。また、細胞周期制御やDNA損傷応答に関して他の細胞種と異なる点が多いが、多能性制御との関連性は不明である。本研究室では、多能性幹細胞の細胞周期の大部分をしめるDNA複製の制御に焦点を当て、多能性制御とゲノム恒常性維持との関連性について解析を進めている。また通常、個体内では分化細胞が脱分化して多能性を再獲得することはない。どのような制御が脱分化を妨げていて、その破綻が細胞に対してどのような影響を持つのか、細胞融合の実験系を用いて分子レベル、細胞レベルで研究を行っている。

○ オルガネラ制御研究室

真核細胞の特徴であるオルガネラ（細胞小器官）は、いつも定常状態で機能しているのではなく、個体の成長に伴う細胞分化や環境変化に応答して柔軟に機能を変換させ、新たに生成したり逆に消失したりと、極めて動的なふるまいを示す。こうしたオルガネラの動的変動が、種子の発芽や環境適応、種子形成など植物個体が示す様々な生命現象の基盤となっている。本研究室では、植物ペルオキシソームとオイルボディを主たる研究対象として、細胞生物学、分子生物学、遺伝学、生理学などの手法とイメージング技術を組み合わせ、オルガネラの機能発現や形成機構を分子レベルで明らかにすることを目指している。

○ 生殖細胞研究部門

有性生殖を営む多細胞動物において、配偶子-卵子と精子-を作る生殖細胞は、次の世代

に遺伝情報を正確に伝達する。一方、多数の配偶子を継続して生産することにより子孫を確実に残すことが担保される。本研究部門では、マウス精子形成を主な対象として、正確性と生産性を併せ持つ配偶子形成の謎に挑戦している。継続する精子形成を支える「幹細胞」の細胞としての実体、その精巣内での振る舞い、細胞集団としてのダイナミクス、それを制御する「ニッチ」の実態と機能、これらの機能を支える分子メカニズム—これらを中心課題に据えて、形態学、分子遺伝学、ライブイメージング、数理統計解析など多角的方法論で研究を進めている。

○ 形態形成研究部門

受精した卵が細胞分裂を繰り返しながら生物固有の形づくりを進行する過程、すなわち形態形成には個々の細胞の形態変化や移動による3次元的な組織リモデリングが必須である。細胞分化によって新たな形質を、また細胞骨格の再構成によって新たな形態や細胞極性を獲得した細胞は、それぞれの運命にしたがって正しく配置されることによって、形態的、機能的に洗練された器官、そして個体を形づくり。本研究部門では形態形成を司る細胞外シグナルや物理的な力に焦点をあて、細胞・組織ダイナミクスを解明することを目標にして、ホヤ、アフリカツメガエル、マウスなどモデル動物を用いた研究を行っている。

○ 分子発生学研究部門

動物の形態形成のさまざまな局面で分泌性タンパク質は重要な働きを担っている。本研究部門では脊椎動物の体幹部の初期発生をモデルに、形態形成過程における分泌性タンパク質の作用機構を解明することを目指している。具体的には、分泌性タンパク質およびその標的遺伝子の機能を、遺伝子改変マウスやアフリカツメガエルを用いて解析すること、ならびに体幹部形成変異体の探索とその解析を、ゼブラフィッシュを用いて行っている。

○ 初期発生研究部門

動物の発生は受精卵に始まり、やがて明確な体軸を持つ構造が形成される。ほ乳類受精卵には将来の体軸に関わる情報は偏って存在していないが、マウスでは受精後約6日目には将来の体軸を見いだすことができる。ほ乳類胚において、体軸を決める情報がどのように胚の中に形成され、形として具現化されるかを解明することを目指している。主にマウスを用い、ライブイメージング、細胞系譜解析などの手法により、胚の中での細胞の挙動を明らかにする。ライブイメージング観察用の一連のレポータートランスジェニックマウスの作製および維持、胚の培養、顕微鏡装置の開発も行っている。個々の細胞の個性がどのように獲得され、胚全体の形が形成されるかについても研究を進めている。

○ 神経行動学研究部門

運動・行動を作り出す際の中枢神経系神経回路の作動様式を、単一神経細胞レベルの解像度で明らかにすることは、神経科学の大きな目標の1つである。本研究部門は、シンプルな中枢神経系を持つ小型魚類を用い、動物の行動が作り出される際の神経系の動作様式の解明を目指している。さまざまなタイプの神経細胞を特異的にラベルするトランスジェニックフィッシュを多数作製し、(i) 特定のタイプの神経細胞の活動パターンを電気生理

学やイメージングによって計測すること、(ii) 光遺伝学手法などを用いて、特定のタイプの神経細胞の活動を人為的に制御すること、が研究手法の中心である。現在、ゼブラフィッシュ幼魚を用い、(1) 遊泳リズムの作られる仕組み、(2) 運動のスピードを切り替える仕組み、(3) 胸びれと体幹の動きを協調させる仕組みの解明を中心に研究を進めている。

○ 神経生理学研究室

(モデル生物研究センター モデル動物研究支援室 哺乳動物飼育開発支援ユニット・モデル動物解析支援ユニット、小型魚類飼育開発支援ユニット、器官培養研究支援室)

動物の行動生物学が中心課題。現在はメダカとヒトの視覚系の解析を中心に、行動生物学的な研究を行っている。視覚の動物と言われるメダカとヒトに心理物理学的なアプローチを行うことによって、動物の見るメカニズム、そして行動の原理を明らかにしていく。多くの動物は見るという能力を発達させることによって、生存競争に勝ち残ってきた。見るメカニズムを明らかにすることで、脳の、そして動物の理解が深まると考える。

○ 生物進化研究部門

全ての生物は約40億年前に生じた一つの祖先生物から進化してきた。現生生物に見られる多様性は40億年間に蓄積した突然変異によって引き起こされたものである。従って、生物進化の痕跡は現生生物のゲノム上に記されている。

しかし、ゲノムを見ただけでは表現型進化にどんな遺伝子が関わったのかはわからない。ゲノムを改変してはじめて、ゲノムのどこが表現型に影響を与えるのかを明らかにできる。我々は、ゲノム解読とゲノム改変を通して、生物進化の鍵となった以下の3つの現象が、どのような遺伝子のどのような変化によって進化したのかを解明する。

- (1) 陸上植物の体制進化
- (2) 植物の食虫性と運動の分子機構解明と進化
- (3) 分化細胞から幹細胞への変化を担う分子機構と進化

○ 共生システム研究部門

マメ科植物は根粒菌(原核生物)の感染を受けると根に細胞分裂を誘導し、根粒という共生窒素固定器官を形成する。一方、多くの陸上植物はアーバスキュラー菌根菌(真核生物)と共生し、リンをはじめとするミネラルを効率よく吸収する。近年これら2つの共生には、複数の共通する宿主遺伝子が関わっていることが明らかになってきており、また根粒形成の制御においてはメリステム形成の制御遺伝子が複数流用されてきたこともわかってきた。当研究室では、マメ科のモデル植物であるミヤコグサを用いて、新たな実験系の開発とともに、植物・微生物共生の分子メカニズムと進化プロセスの解明に取り組んでいる。また、共生やパターン形成のシミュレーションによる数理モデル解析を行い、生命現象の別角度からの理解を目指している。

○ 進化発生研究部門

圧倒的な種数の豊富さを誇る昆虫は、多様性の宝庫であり、多様性創出の進化メカニズムを解き明かすための研究材料として未知で無限の可能性を秘めている。本研究部門では、昆虫が進化の過程で獲得した新奇形質に着目し、昆虫の多様な形質をもたらす分子基盤および進化メカニズムを解明することを目指している。現在、「昆虫翅の起源と多様化」、「テントウムシの斑紋と擬態」、「カブトムシの角の獲得と多様化」などの研究テーマについて取り組んでいる。非モデル昆虫が持つ興味深い現象の解明には、斬新なアプローチと新規実験技術の導入が必須であり、遺伝子機能解析法などの開発も行っている。

○ バイオリソース研究室

(モデル生物研究センター モデル動物研究支援室 メダカバイオリソースユニット)

条鰭類は脊椎動物の約半数を占める大きなグループである。また条鰭類は哺乳類を含む肉鰭類と姉妹関係を形成することから、我々「ヒト」を含む哺乳類の進化を考察する上でも重要な位置を占めている。我々の研究室では、メダカとその近縁種を用いた性決定システムの進化に関する研究、体色突然変異体の原因遺伝子の同定とその機能解析、脳内の神経活動を可視化するための cre driver 系統の作成などを行っている。Fosmid ライブラリーの作成、遺伝子導入系統の作成、変異体のマッピング、TILLING 法による突然変異体の同定などの共同研究に対応することができる。さらに近年開発された CRISPR-Cas9 によるゲノム編集に必要な gRNA 用プラスミドの調整や卵への DNA/RNA マイクロインジェクションを行うことができる。また 2017 年から始まった第 4 期メダカバイオリソースプロジェクトを担う中心研究室として、メダカバイオリソースの収集・保存・配布をおこなうことでメダカ及びメダカ近縁種をもちいた新たな生物学研究の推進を担っている。

○ 構造多様性研究室

鱗翅目昆虫の成虫翅は二次元の上皮組織であり、翅輪郭形状の決定・気管、気管小枝および翅脈のパターン形成・これらと関連した斑紋パターン形成などの興味深い過程を示す。これらの過程を形態学的な手法を用いて細胞レベルで詳細に記述するとともに、内在するメカニズムを明らかにしようとしている。

○ 多様性生物学研究室

多様な生物を用いて、各グループが独自の研究を行っている。

大野グループ：

ナマコ、ヒトデ、ウニ、ウミシダ等における神経ペプチドの生理作用を、生殖腺および生殖細胞の成熟制御を中心に研究している。

鎌田グループ：

出芽酵母を用いて、栄養環境センサー分子 TOR の研究を、遺伝学・生化学・細胞生

物学などさまざまな手法を駆使して行っている。

定塚グループ：

酵母をモデルとして、細胞分裂期に形成されるコンパクトに凝縮した染色体の構築機構と、その構造が生物機能に果たす役割について研究している。

星野グループ：（モデル生物研究センター モデル植物研究支援室・アサガオバイオリソースユニット）

アサガオの多様な変異体を使い、遺伝子の発現制御機構と花色の発現機構を研究している。アサガオのゲノム情報など、研究基盤の整備も行っている。

梶根グループ：（モデル生物研究センター モデル植物研究支援室）

イネの内在性トランスポゾンの転移によるゲノムの多様化や遺伝子機能の変化について研究している。

加藤グループ：（生命創成探求センター）

光学顕微鏡や電子顕微鏡等で撮影された生物画像を対象として、新規の画像処理・解析手法の開発やアプリケーションソフトウェアの開発等を行っている。

○ 環境光生物学研究部門

植物は、環境の変化に自らを順化適応させることで生き残りをはかる。太陽光を集め利用可能なエネルギーへの変換を行う光合成においても、さまざまな階層における光環境適応がみられる。本研究部門では、単細胞緑藻を中心としたモデル微細藻類について、分子遺伝学、生化学、分光学的手法さらにはライブイメージングの手法を駆使することで、特に光を集めるアンテナ装置がいかにか光を集めているのか、その分子基盤やシグナル伝達の解析を行っている。また、得られた基礎的知見をサンゴと共生する褐虫藻にも応用し、環境において重要なこれらの光合成生物の生理生態の理解を目指している。

○植物環境応答研究部門

陸上植物にとって、重力に対して成長方向を制御したり体の支持構造を発達させたりする重力応答は、基本的で重要な環境応答である。重力屈性は、植物が重力方向を認識し、根を水分や栄養分が豊富な地中へ、地上部を光合成や生殖に有利な上方へと各器官を配置する役割を担う。茎や根が鉛直線に沿う正常重力屈性と共に、重力方向を指標にして器官の成長方向を斜めに保つ傾斜屈性は、根の張り方や枝振りなど植物全体の構造を調節する。本研究室では、植物が重力方向を認識する機構、重力情報に基づいて成長を制御する機構、器官によって角度を調節する機構、重力以外の光や湿度などの複数環境情報を屈性に反映

させる情報統御機構について、シロイヌナズナをモデル系として、分子から個体までをつなげて理解することを目指している。

○ 時空間制御研究室

本研究室では発生における左右非対称性決定の機構をマウス胚のライブイメージングによって解析している。またライブイメージングに適した顕微鏡自体の開発も手がけている。現在、褪色や光毒性が少なく高速な立体画像取得を特徴とする光シート顕微鏡を操作性に優れた市販品と高速性能に優れた自作品の2台運用しており、統合イメージング共同利用研究などの枠組みで発生生物学、細胞生物学、神経科学等での共同利用を実施している。

○ モデル生物研究センター

モデル生物研究センターは、生物学研究の基盤となるモデル動植物等について、飼育栽培のための設備を提供するとともに、形質転換体の開発や保存、さらには解析研究の支援を行う施設である。本センターは、モデル動物研究支援室（哺乳動物飼育開発支援ユニット、モデル動物解析支援ユニット、小型魚類飼育開発支援ユニット、メダカバイオリソースユニット）、器官培養研究支援室、モデル植物研究支援室（アサガオバイオリソースユニット）から成り立っている。マウス施設では、ノックアウトマウス・トランスジェニックマウス作製などにより遺伝子操作マウスの開発・飼育維持・解析を行い、受精卵凍結法により系統保存を行っている。平成19年度からメダカバイオリソースの中核拠点となり、従来の変異体や遺伝子導入小型魚類飼育管理に加え、全国の汎用系統なども管理維持し、配布と有用系統の開発も行っている。鳥類施設では遺伝子導入により、遺伝子機能解析研究が可能となっている。器官培養施設では、細胞と器官レベルの実験を支援している。植物施設ではモデル植物の育成と形質転換体の開発支援を行っており、解析用の各種人工気象室を備えている。アサガオ施設は、ナショナルバイオリソースプロジェクトの分担機関として、アサガオの各種リソースの収集・保存・提供を行っている。

1. モデル動物研究支援室

1) 哺乳動物飼育開発支援ユニット

SPF マウスの飼育及び開発の支援を行っている。モデル生物研究センターの施設内には最大2万匹のSPFマウス飼育できる設備を備えており、マウス飼育支援のための凍結受精卵の作成、保管、解凍、移植の支援も行っている。さらにはトランスジェニックマウスやノックアウトマウス作成を支援するための偽妊娠マウスや里親の供給も行っている。所内の部門や研究室を通じた共同研究を支援している。

2) モデル動物解析支援ユニット

SPF マウス及び SPF ラットを利用した解析研究を支援している。モデル生物研究センターの施設内には、主として行動解析を行うための実験室を三つ備えている。一つは山手地区 SPF 施設内にある行動解析専用施設で、残り二つは明大寺地区にあり P2 及び P3 レベルの組換え DNA 実験室も可能な行動解析実験室となっている。所内の部門や研究室を通じた共同研究を支援している。

3) 小型魚類飼育開発支援ユニット

近年新たに実験動物として確立されてきたメダカ、ゼブラフィッシュを用いた実験、さらにニワトリを主として用いた鳥類の実験を支援する。自動循環水槽や大型の孵卵室を備え、卵へのマイクロインジェクションもユニット内で可能となっている。新たな遺伝子改変系統の作出を行っており、それら遺伝子導入小型魚類が飼育維持できる環境 (P1A) を整えている。ニワトリの遺伝子組み換え実験 (P2A) にも対応可能となっている。

4) メダカバイオリソースユニット

メダカバイオリソースユニット (<http://www.shigen.nig.ac.jp/medaka/>) ではメダカに関する生物遺伝資源の収集・保存をおこない、それらを統合的に提供することでメダカを用いた生物学・基礎医学分野を飛躍的に発展させることを目的として活動している。現在は 600 以上のメダカ系統、40 万あまりの cDNA クローン、28 万あまりの BAC/Fosmid クローン、孵化酵素の提供とともに、2010 年からは TILLING による変異体スクリーニングシステムの提供も行っている。2014 年度からは CRISPR-CAS9 によるゲノム編集のサポートも行っている。

2. 器官培養研究支援室

培養細胞及び培養器官を利用した研究を支援する。モデル生物研究センターの施設内には、一般細胞培養室を初め、ES 細胞専用培養室、P2 実験専用培養室、器官培養室、酵母培養室などを備えている。また山手地区と明大寺地区それぞれに凍結細胞を保存するための大型液体窒素タンクを備えている。所内外の共同研究の支援を行っている。

3. モデル植物研究支援室

シロイヌナズナ、ミヤコグサ、アサガオ、ヒメツリガネゴケ、クラミドモナスなどのモデル植物を、光・温度・湿度等を厳密に制御した環境条件のもとに培養育成するためのインキュベーターや恒温室が整えられている。また、強光及び極低・高温の極限環境下で培養育成する施設も設置されている。これらのほとんどは P1P レベルに指定されており遺伝子組換え実験も可能である。屋外には大小 2 つの温室、3 棟 (4 室) のファイトロン、2 棟 (5 室) の P1P レベル形質転換植物用温室、圃場及び管理室が設置されている。

1) アサガオバイオリソースユニット

アサガオバイオリソースユニットでは、ナショナルバイオリソースプロジェクト・アサガオ (代表機関：九州大学) の分担機関として、アサガオの各種リソースの収集・保存・提供を行っている。おもに取り扱うリソースは、変異系統ならびに cDNA と BAC クローンである。国内外におけるアサガオと近縁種の研究を支援している。

○ 生物機能解析センター

共同利用研究体制の強化を目的とした研究施設の改組により、平成 22 年度に生物機能解析センターが設立された。生物機能解析センターは、生物機能情報分析室、光学解析室、

情報管理解析室より成り、それぞれの室に所蔵される分析・光学機器を用いた実験・研究をサポートできる体制を整えている。このような機器を利用した研究とともに、それぞれの室に所属する教員は独自の研究を展開している。

生物機能情報分析室は、遺伝子・タンパク質解析の共同研究拠点として、基礎生物学研究所の分析機器の管理・運用を行っている。超遠心機のような汎用機器から次世代シーケンサーのような先端機器に至るまで、50種類90台にのぼる機器を所蔵し、その多くは所外の研究者にも開放している。（生物機能情報分析室ホームページ <http://www.nibb.ac.jp/analyins/jp/>参照）特に、機能ゲノミクスに力を入れており、次世代DNAシーケンサーと質量分析機を利用した共同利用研究を行っている。

光学解析室は大型分光照射施設である大型スペクトログラフと、光シート顕微鏡、2光子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、さらに赤外レーザーで局所的遺伝子発現を実現するIR-LEGO顕微鏡を所蔵している（各装置の詳細は光学解析室ホームページ <http://www.nibb.ac.jp/l spectro/>参照）。これらの機器を用いた共同利用研究を行っている。また、植物の電子顕微鏡撮像の支援も行っている。

情報管理解析室は、共有メモリサーバ、分散処理用計算機クラスタ、大容量ディスクアレイ装置などから構成される生物情報解析システムを運用しており、これらを用いたゲノム規模での配列データ解析や画像処理、各種データベースの構築と運用のサポートなどを行っている（詳細は <http://www.nibb.ac.jp/cp room/>参照）。これらの設備を活用した、大規模データ解析やデータベース構築などを含む研究課題を共同利用研究として公募している。

1. 生物機能情報分析室

最先端のゲノム科学を駆使して、「共生・発生・進化」をキーワードに研究を行っている。特に、昆虫アブラムシとその共生細菌ブフネラの共生系をモデルに、共生によるイノベーションを支える分子・遺伝子基盤とその進化過程の解明を目指している。実験生物学と情報生物学の融合的アプローチが特徴である。

2. 光学解析室

「光」を使った非侵襲的な遺伝子発現誘導顕微鏡と、遺伝子の変異体ライブラリーから作製した変異体を組み合わせ、「個体レベル」での遺伝子機能解析を行っている。研究対象としては光学的アプローチに適し、ゲノムなどの情報が完備されたモデル生物である「メダカ」を使っている。遺伝子発現誘導顕微鏡とは、生体内の単一細胞に赤外線を照射することで熱ショック応答により目的の遺伝子発現を誘導するIR-LEGO法(Kamei et al. Nat. Methods, 2009)である。一方で、上記顕微鏡技術を駆使し、メダカ変異体や、トランスジェニック技術を使って生体内における様々な遺伝子の機能解析を目指している。

3. 情報管理解析室（ゲノム情報研究室）

情報科学的アプローチで大量のゲノム情報から生命現象の理解を目指す研究を行っている。特に、近年急速にデータが蓄積し、自然界における多様性の実態が明らかになりつつある微生物のゲノムを対象として、網羅的な比較解析によるゲノム情報の体系化と、それに基づくゲノムの機能や進化の解明を目指した研究を行っている。このため、多数のゲノ

ムを同時に比較するための高速オーソログ分類手法の開発や、それに基づく網羅的な比較ゲノムデータベースの構築を行ってきた。こうした情報基盤に基づいて、水平移動を含む複雑な微生物ゲノムの進化プロセスの解明に向けた取り組みを進めている。

○ IBBPセンター

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、広い地域において研究・開発活動にも大きな影響を与えた。地震による直接被害とともに、長期にわたるライフラインの停止によって実験動物の飼育も困難となり、ディープフリーザー等に保管していた生物遺伝資源は長期停電によって大きなダメージを受けた。日本は東日本大震災後も震度6強を越える地震が熊本県熊本地方及び阿蘇地方や鳥取県中部地方など年1回以上の頻度で発生する地震多発国であり、研究・開発活動を震災から守るための対策は不可欠である。

災害や不慮の事故による生物遺伝資源の毀損や消失を回避するためには、個々の研究によって創出された生物遺伝資源のバックアップを作成し、オリジナルとは地域的に離れた場所に保管することが有効である。このため個々の研究者が作成した生物遺伝資源のバックアップ保管を目的とした大学連携バイオバックアッププロジェクト（IBBP）を平成24年度から新たに開始した（<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/>）。

IBBPでは自然科学研究機構基礎生物学研究所に気相及び液相式液体窒素タンク、液体窒素自動供給システム、ドライキャビネットを備えた種子保存室、超低温フリーザー、検体管理データベースシステム、機器監視システム、液体窒素製造装置など生物遺伝資源のバックアップ保管に必要な最新の設備を備えたIBBPセンターを設置した。

IBBPセンターは、生物遺伝資源の保管・管理を担当する。また北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学には大学サテライト拠点を設置し全国の大学・研究所からのバックアップ依頼を受け付け、IBBPセンターと協力してプロジェクトを推進する。IBBPセンターでは上記の保管施設に加え、プログラムフリーザー、示差走査熱量計、真空冷却加熱ステージ付き蛍光顕微鏡、精子運動自動解析装置等の超低温保存技術の開発を推進するための機器を備えている。

さらに、生物遺伝資源新規保存技術開発共同利用研究の実施や Cryopreservation Conference の開催によって、生物遺伝資源開発者と低温生物学・化学・物理学研究者等の出会いを提供し、より多様な生物遺伝資源の長期保存技術の開発を推進している。また開発された技術を研究コミュニティに広げる技術講習会も開催している。

○ 生命創成探究センター・核内ゲノム動態研究グループ

ヒトを含む様々な生物種のゲノムDNAの塩基配列の全容が明らかとなり、細胞特異的なエピゲノム情報も蓄積されつつある。最近では、核内におけるクロマチンのローカルな3次元構造が転写を含むゲノムの機能に重要な役割を担うことが明らかとなってきた。この膨大なゲノム情報はクロマチン繊維として数 μm の核に絡み合うことなく収納されており、その立体配置をもったゲノム核内構造は高度に組織化されている。当研究室では、クロマチンの動きをイメージングする新しい技術を用いることで、これまでとは全く異なるユニークなアプローチで、核内ゲノムのトポロジー変化が細胞の運命決定へ与える影響を理解し、ゲノム高次構造の制御メカニズムの解明に迫る。

○ 生命創成探究センター・植物発生生理研究グループ

発生現象を適切に進めるためには、細胞（群）の運命・役割を決める化合物を生成したり、進行そのものの維持に関わる代謝システムを働かせたりする必要がある。ところが、発生過程に連動した代謝システムの制御は、思いのほか理解されていない。そこで本研究室では、代謝システムの視点から、発生現象のより良い理解を目指している。具体的には、特定の発生現象と連関している未知なる代謝システムを同定するために、モデル植物であるシロイヌナズナを用いた遺伝学的スクリーニングを行い、そのうえで詳細な個別の解析を進めている。また、従来の生化学や分子生物学的な手法に加えて、代謝物を網羅的に解析するメタボロミクスを活用し、代謝システムを発生現象と連動させる仕組みや、その生体内における機能的な役割についても解明を目指している。

(様式1)

第 年 月 日 号

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長 殿

大学大学院
氏名

研究科長
職印

特別共同利用研究員の受入れについて(申請)

標記のことについて、下記の者を申請しますので、よろしくお取り計らい願います。

記

ふりがな 学 生 氏 名		男 女	年 月 日生 (年令 才)
現 住 所	〒 - TEL() -		
課 程・専 攻	課 程 学専攻	入 学 進 学	
		2019年度 第 年次	・ 区 分 制 ・ 5年一貫制
受入希望の研究部門 等名及び指導担当研 究教育職員氏名			
研 究 題 目			
受 入 希 望 期 間	年 月 ~ 年 月		

(様式2)

推 薦 書

年 月 日

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長 殿

指導教員(推薦者)
所属・職名・氏名

印

貴研究所の特別共同利用研究員として下記の者を推薦します。

記

推薦する学生の氏名・所属	
推薦理由（評価及び貴研究所での研究内容を含む。）	
健康に関する所見	

(様式 3)

推薦書 (受入承諾書)

年 月 日

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長 殿

受入れの指導研究教育職員 (推薦者)
職名・氏名

㊞

特別共同利用研究員として受入れることを承諾しますので、下記のとおり推薦します。

記

推薦する学生の氏名	
推薦理由	